187

高橋貝塚（たかはし）

（日置郡金峰町高橋）

位置と環境

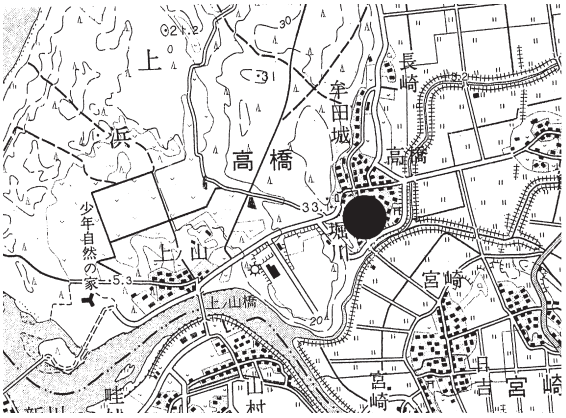
薩摩半島の西岸は，東支那海に面して，弓なりに湾曲した砂浜海岸で，市来町戸崎以南，加世田市付近まで約40㎞の間は吹上砂丘を形成して，最高地点は約60ｍの砂丘列が延々と延びている。この背後には金峰山脈が南北に走り，砂丘との間に細長い平野が延びている。

高橋貝塚は，砂丘の南端に近い万瀬川の支流堀川の右岸，海岸から2.5㎞の高橋集落に在る。砂丘の内側の崖端に位置し，東方は堀川のつくる低い沖積平地に広がる水田に約７ｍの比高を持って望んでいる。

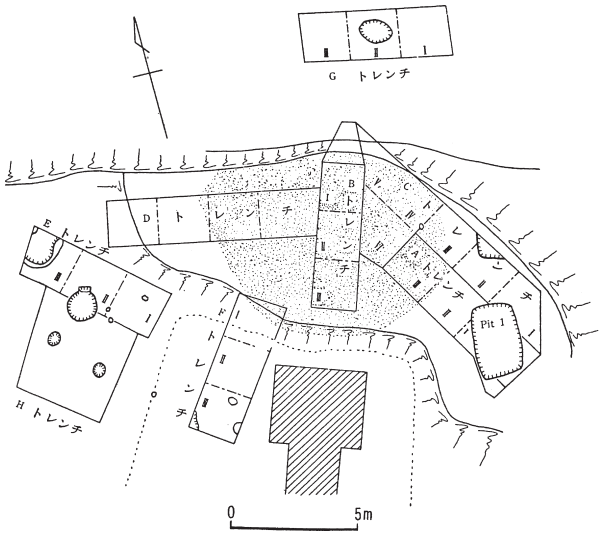
貝塚は玉手神社の境内にあり，神殿の背後の小丘がそれである。堀川がつくった河岸段丘上に形成されたものであるが，砂丘が迫って砂丘上に形成された感を与える。貝塚の中心は標高11ｍ，範囲は東西10ｍ，南北７ｍで，周囲を遺構が囲んでいる。貝塚は後世南部を削平されて社屋が建てられている。

調査の経緯

高橋貝塚は，昭和24年田布施小学校教頭寺師宗俊が発見したが，未調査のまますぎ，昭和36年に再発見され，田布施小学校教諭辻正徳の報をうけて，河口貞徳等が金峰町・鹿児島県の援助を得て，昭和37年８月２日～11日，昭和38年８月15日～28日の二次に渡る調査を行った。



第１図　高橋貝塚の位置



第２図　高橋貝塚の範囲とトレンチ

遺構と遺物

調査は，Ａ～Ｇトレンチを設定して行った結果，貝塚の東南部に接して貯蔵穴２基，西部に６ｍを隔てて住居跡１基が出土した。

貯蔵穴は，№１を完掘した。隅丸方形で，長軸は３ｍ，単軸は1.78ｍ，深さ60㎝で，上面より床面へ拡がるという特徴がある。入念な作りのパイプ形土製品が床面に出土したのが注意を引いた。

住居跡は，中央に炉を設けた隅丸方形の竪穴住居跡である。住居跡の壁に沿って幅20㎝深さ20㎝ほどの溝を巡らしている。中央の炉跡は深さ15㎝ほどで，灰・木炭片・獣骨が出土した。床面には柱穴が検出されている。

Ｄトレンチ２，３区から人骨の小片らしいものが出土している。Ｄ１区２層からは壺棺が出土し，ゴホウラ製腹面貝輪を伴出している。高橋の人々は，この時期に始めて南海のゴホウラやオオツタノハ貝を移入して，腹面貝輪や背面貝輪を創作し，早速腕輪として着装していたのである。これが南海産の貝移入の始まりとなった。

高橋貝塚は，貝塚であることによって，狩猟文化から農耕文化へ，縄文文化から弥生文化への移行がどの様に行われて行ったかを具体的に示すものとなっている。弥生時代初頭の遺跡の福岡県の夜臼遺跡，熊本県の斎藤山遺跡では，僅かに貝塚の形跡はあるが，縄文・弥生文化の関係は明瞭でない。この問題に就いて，高橋貝塚は重要な資料を提供している。

高橋貝塚で出土した動物は，哺乳類・鳥類・爬虫類・魚類・貝類に渡っているが，哺乳類についてみると，サル・ノウサギ・タヌキ・アナグマ・テン・イヌ・イノシシ・シカが出土しており，この内イヌは飼育動物であり，イノシシとシカが主要な獲物で，狩猟の数は他に比較して圧倒的に多い。出土重量を縄文の貝塚に比較すると，高橋貝塚の方が，市来貝塚や黒川洞穴よりもかなり多い。

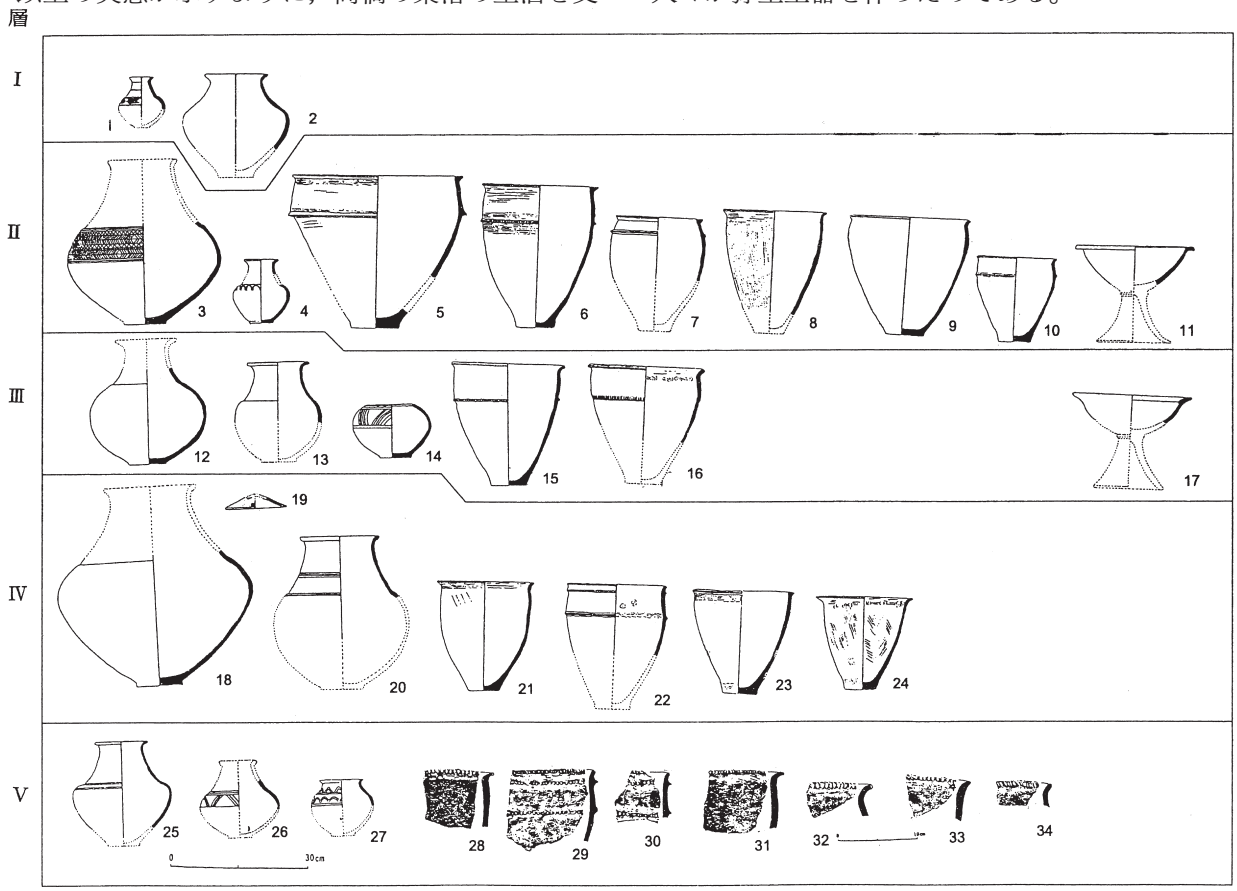
出土の貝は，海水産の貝が多く，43種の貝の内海水産37種，淡水産４種，陸産２種で，海水産は殆ど内湾浅海・砂泥・岩礁性のものである。貝の種類は大半はナガカキで，次いでオキシジミ・ハマグリ・マシジミ・タケノコカワニナ・マルタニシなどが見られる。特殊なものとしては，種子島以南の海に産するゴホウラ・オオツタノハがある。この時期に始めて貝輪の素材として移入れたものである。オオムガイが見られるのは，漂着したものを拾ったものであろう。砂丘は現在ほどの規模はなく，良好な漁場が遺跡に近い位置にあったと思われる。

以上の実態が示すように，高橋の集落の生活を支えたものは新しく起こった水田耕作と共に，従来からの伝統の狩猟漁労であった。この様な生産形態は，土器文化・石器文化の組み合わせの上に如実に現れてくるのである。その事を具体的に証明してくれるのは，貝塚の年代にしたがって堆積した貝塚の層序である（Ｂトレンチの５層の堆積を示す層序)。

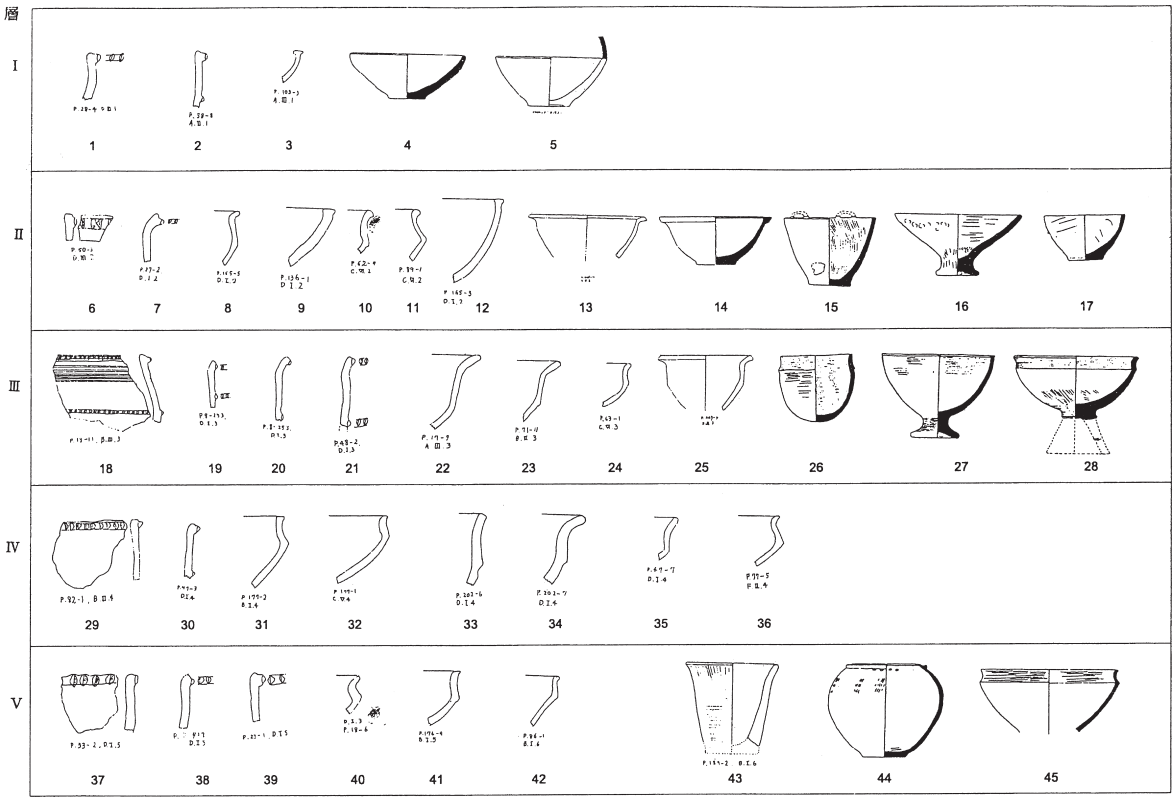
今一つ高橋の文化を特色付ける要因は，大陸・南島・北九州・瀬戸内との交流である。鉄器の出現・ゴホウラ，オオツタノハの始めての移入はそれを端的に示している。

土器について言えば，縄文土器が終りを告げ，続いて弥生土器が現れるのではなく，縄文土器が使われていると同時に，弥生土器が平行して使われて，両者は重複して使われる。高橋貝塚では，６層から１層まで縄文晩期の夜臼式土器と，弥生前期の高橋の土器が共伴して出土するのである。

高橋の集落では，同じ集落の人々が狩猟・漁労を行い，水田の耕作を行ったのである。高橋ではある人々は夜臼式土器を作り，時を同じくして高橋の人々が弥生土器を作ったのである。



第３図　高橋貝塚の層位別弥生土器



第４図　高橋貝塚の層位別縄文土器

土器の編年は，従来の型式論にしたがって，分類・編年を行い，高橋Ⅰ式・高橋II式・高橋III式・高橋IV式とし，高橋Ⅰ式・高橋II式を弥生前期，高橋III式・高橋IV式を弥生中期とし，夜臼式土器は縄文晩期として分離した。この編年は板付遺跡と見合うものではあるが，高橋遺跡の貝塚の層位に基づく土器出土の序列（実態）とは整合性がないことが判明した。

高橋貝塚の貝塚を形成している部分は，層位が明瞭に５層に別れており，縄文土器と弥生土器とが同様な状態で各層に包含されている。これは縄文文化と弥生文化の接点の実態を明確に示す類例のない遺構である。Ｂトレンチ西断面図は高橋貝塚の堆積の状態を示している。

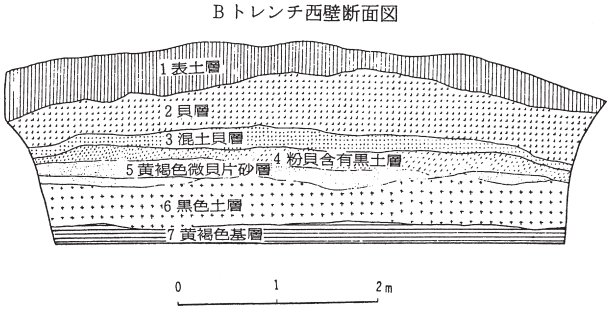
この貝塚の土器の層位別出土状況は，縄文土器と弥生土器のそれぞれの編年，縄文土器と弥生土器の共伴関係を示す唯一の・確実な資料である。次に高橋貝塚の層位別弥生土器・高橋貝塚の層位別縄文土器として図表化して第３図・第４図に示す。第３図の弥生式土器は第Ⅴ層の土器が古く，上層になるにしたがって新しくなり，第Ⅰ層の土器が最も新しいものですべて弥生前期である。第４図の縄文土器も同様に層位に従って新旧関係があり，いずれも縄文晩期であり，両図の縄文と弥生土器は層位によって共伴関係と前後関係にある。

第４図３層の26の土器は，同じタイプの土器が奄美の笠利町手広遺跡の第７層から出土しており，宝島の浜坂貝塚からも同類が出土している。南島に属するもので移入されたものと思われる。

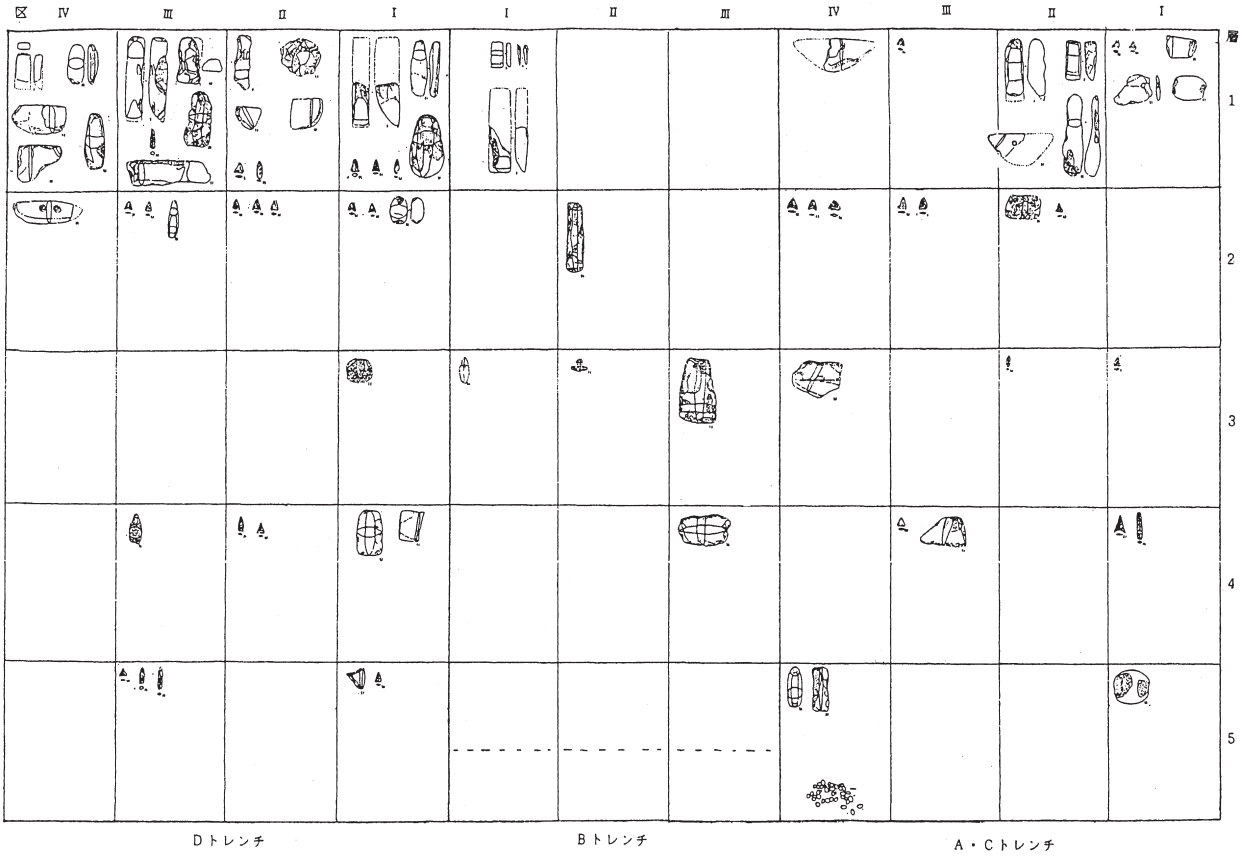
この頁は第６図，第７図を掲載する。

石器

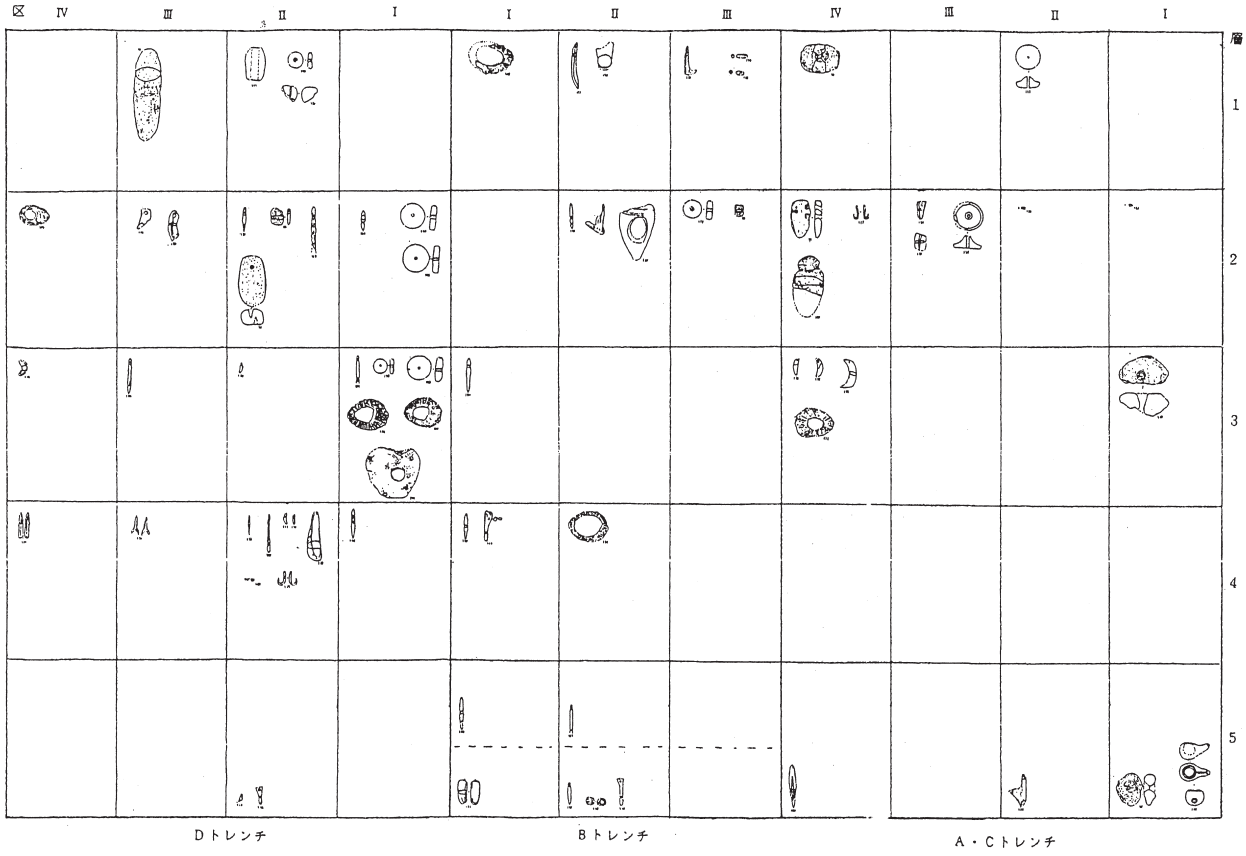
従来弥生に属するものとして取り扱われてきたが，縄文と弥生の両文化が重複しており，遺物も両文化



第５図　高橋貝塚のトレンチ断面図



第6図　層位別石器出土図



第7図　層位別骨角貝器他出土図

に属するものであって，この事を明らかにすることによって，両文化の重複の実相がより具体的に明確にされる。

銅剣，銅鏃を摸した，磨製石剣と石鏃が出土しているが，朝鮮半島に見られるもので，大陸に繋がるもので弥生に属するが，数多く出土している石鏃・石槍・石匙は縄文に属するものであり，打製石斧・石錘・砥石・敲石なども縄文文化に属する。

磨製石斧・片刃石斧・石庖丁・石鎌・磨製石鏃・投弾用礫・穿孔石器などは弥生文化に属する。穿孔石器は初めて発見されたが，朝鮮半島でも知られ，北九州でも発見された。石庖丁の穿孔に用いたもので，火鑽杵のような方法が考えられる。

管玉にはヒスイと鉄石英が用いられているが，断面が角丸方形で切り口が丸みを帯びた鉄石英の縄文晩期のものと，断面が円形でヒスイの弥生の管玉とがある。前者は双方から穿孔しており，後者は片方から穿孔している。ヒスイ製でも双方から穿孔したものもあり，新旧の技術が平行して行われたことがわかる。これが高橋の文化を端的に示している。

骨角牙貝器他

骨角牙製品は，もともと狩猟によって得られた素材であるから縄文文化に属するものが多い。鏃・釣針・利器・垂飾等がある。貝は前に述べたように，縄文文化では，地場産の貝を素材として貝輪を作っていたが，この時期に始めて南海産のゴホウラ・オオツタノハ貝を移入して貝輪を作った。ゴホウラでは肥厚した外唇部を利器として使用している。これらは弥生文化に属するものである。

土製品としては，紡錘車・土版形土製品・蕨手形土製品・脚部などがある。脚部以外は弥生文化に属するものである。脚部はＢトレンチⅡ区１層から出土したもので，中空の脚部の土器である。中国に三脚の土器で鬲（れき）という器がある。脚は中空で，高橋出土の脚にそっくりである。中国の鬲は水を煮て水蒸気を作り，上に甑をのせて穀物を蒸す容器である。灰陶でも作られ，戦国時代初めまで及んでいる。高橋遺跡では甕形土器の底部に孔を開けて甑として使用した例が多い事と中空の脚の存在を考え合わせると，中国の鬲の用法が高橋貝塚に伝わったものではないかと考えられる。

軽石を素材とする製品が見られるが，縄文の時期以来引き続いて行われるもので，可塑性が強いので当該時代に最も適応しやすいものが作られる。

高橋では，狩猟文化と農耕文化とが平行して行われたという様相は，土器の面だけではなく，土器以外の石器・骨角牙貝器・土製品とも密接な関わりを持って成立していたことが明らかになった。

高橋では中国から入ったものに鬲のほかにわが国で最も早く鉄器が（斎藤山も同時）もたらされている（写真１）。国内では奄美の隆帯丸底土器のほかに瀬戸内の第８図の甕形土器土器ももたらされており，周辺地域との交流が盛んであったことを示している。また布や水鳥土偶の存在などは高橋の人々の生活を想像させるものとなっている。

資料の所在

出土遺物は，河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

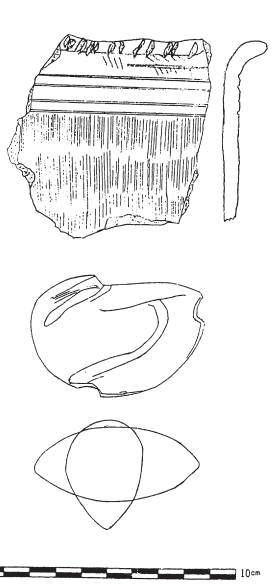
河口貞徳1965「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第３巻２号東京考古学会

河口貞徳1963「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18九州考古学会

（河口貞徳）

写真１　高橋貝塚出土の鉄器

第９図　高橋貝塚出土の布痕土器



第８図　高橋貝塚出土の瀬戸内系土器と土偶（水鳥）